



第42回沖縄国体、空手競技の部に出場

# 五十川敬子さん

(吉原緑ヶ丘・24歳)

練習は一時間半ずつ週四回、成年女子では県内に敵がいません。支部長の渡辺邦義さんは「天性のスピードとバランスに加えて練習熱心」と力を認めます。年ごろの乙女ゆえ、強い女のイメージはいかがかと思えば、「人にエーホント!?と言われるのが好き」という明るい性格。空手に理解のある花婿さん募集中です。



男のスポーツと思われがちなスポーツ、空手。五十川さんは昭和五十八年に続き、一回目の国体出場を決めた女性空手選手です。身長百四十八センチと小柄ながら

空手着を着るとなせか大きく見えるから不思議。現在一段。黒帯のほころびが、けいこの厳しさを物語ります。

吉原一中二年生とき「武道にあこがれて」日本空手協会富士支部に入門。「初めは女だてらにと両親、特に父から反対されました」と笑います。

# まちか

## 我がまちを語る



## 小川源太郎さん

今井東町(73歳)

### 海と深いつながり

昔の元吉原の人々の生活は、海と深くつながっていました。人々はほとんどが半農半漁で、田子の浦港から大野町のあたりまで、たくさんの方が漁業の権利を持ち、船を持っていました。

毎年三月下旬から六月までは、天気さえよければ毎日のように網引きが行われ、とてもにぎやかでした。学校が終わると浜に出かけ、網引きのあとで空きびんを拾って、小遣いかせぎをしたものです。そうした海の生活の名残か、元吉原の人は気が荒いといわれたこともありました。しかし、今では「困ったときはお互いさま」という厚い親切心が伝わっています。昭和四十一年の台風二十六号のあと、防潮堤が高くなり安全なまちなりになりましたが、津波と海岸浸食の問題は、自然が相手なだけに心配です。将来にわたって関心をもち続ける必要があると思います。

## あの人この人こんなこと



日本一の花の駅に  
小川守夫さん(柏原町)

元吉原の秋の風物詩といえば、東田子浦駅の菊花展。三十一回目を迎えたことは、十一月二十三日まで開催されています。菊は地元「ふる里の駅を花と緑で飾る会」の皆さんが、丹精こめて育てたもので、その数五百鉢。第十三回から会長を務める小川さんは、「東田子浦駅を日本一の花の駅にするよ」と張り切っています。



俳句の道を五十余年  
吹き抜くアサギさん(鈴川浜町西通)  
明居よし  
立子

市立博物館で開催中の郷土の俳人展。郷土を代表する俳人の一人川上さんの作品も展示されています。十七歳のとき、お父さんから「落ち着きのある子になるように」と俳句を教えられ、以後五十余年。「五・七・五に自分の思ったことを素直に表現し続け、最近やっと俳句の心がわかるようになりました」と奥の深さを語ります。

### 海にロマンを求めて

渡辺公男さん(今井東町)



スキューバダイビングといえば、最近人気のあるマリンスポーツ。海の近くに生まれ育った渡辺さんは、かれこれ十七年の経歴を持つダイバーです。「緊張した心持ちで挑む海中は、自分一人の別世界。この魅力は潜った人でなければわかりません」と語ります。海のロマンを求める渡辺さんは、乙姫様も探しています。

